

事物は色をもちうるか

篠原 成彦

1 見え方としての色と事物のもつ性質としての色

小さな子どもは、暗闇でもリンゴは赤いと思っている。また、赤い下着は身体にいいという俗説を信じる人は、上着で覆われても下着は赤いままだと思っている。彼らの素朴な思いにおいては、明るい場所でリンゴや下着を見るとき、彼ら自身に生じる見え方こそが、リンゴや下着に備わった本当の色なのだ。つまりそこでは、日光下における彼らへの見え方としての色が知覚者にも状況にも左右されない事物の内的性質 (intrinsic property) とみなされている。

だが、こうした素朴な色観 (naive view of color) が誤っているということは、既に17世紀、I.ニュートンによって看破されていた¹。そして現在では、一般的な科学教育の場において (日本では中学校や高校の理科で)、光と色覚の関係が学ばれるようになってきている。そのため、リンゴの表面そのものに、日光下での自分への見え方そのままの性質が、その赤さとして備わっているわけではないということ、少なからぬ人々が知っている。

しかしながら、このように色が何でないかについては一定の事実を知りつつも、我々は、色が何であるかを満足に理解できていない。これは言い換えれば、素朴な色観に代わるべき、あるいはそれを説明の対象とする確固たる色理論を、我々はまだ手にしていないということだ。いや、もちろん、事物が反射する／事物を透過する／光源として事物が発する光のスペクトル組成 (分光強度分布)、そして、それを取り巻く環境における諸条件および知覚者における内的諸条件に応じて、色がどのように違って見えるかといったこと、さらにその違いを我々の脳神経はどのようにコード化しているのかといったことについては、多くの知見や仮説が蓄積されている。だが、それらはいずれも、色とは何であるか、もしくは何であるとすべきかを探るうえでは、重要な手がかりではあっても、